



JICA 埼玉 海外協力隊 & SDGs

持続可能な世界を目指す埼玉の人たち

What's

JICA 海外協力隊?

なんとなく聞いたことはあるけれど、どんな活動をしてるの? 誰が参加できるの?

JICA 海外協力隊は、開発途上国で現地の人々と共に生活し、**同じ目線で開発途上国の国づくりに貢献する活動**を行っています。

JICA (独立行政法人国際協力機構) は開発途上国からの要請 (ニーズ) に基づき、それに見合った**技術・知識・経験**を持ち、**「開発途上国の人々のためにそれらを活かしたい」**と望む方を募集して選考・訓練を経て JICA 海外協力隊として派遣しています。

任期は**原則 2 年間**。これまでに**98 カ国**に**5 万人を超える隊員**を派遣してきました。帰国後は、日本や世界で協力隊経験を活かして活躍しています。

JICA 海外協力隊 3つの主な目的

1

開発途上国の
経済・社会の発展
復興への寄与

日本が持つ技術や経験を伝え、途上国の人々に役立ててもらいます。

2

異文化社会における
相互理解の
深化と共生

深化する相互理解と共生の営みにより持続可能な開発の実現を目指していきます。

3

協力隊経験の
社会還元

本事業への参加を通じて身に付けた知識や経験を日本や世界の発展に役立てることが期待されています。

JICA 海外協力隊 経験者の強み

JICA 海外協力隊経験者は、採用企業・団体の皆様から次のような点が優れていると評価されています。

グローバルな視野

先進国と途上国との両方を経験することで世界を多角的に捉え、派遣された国だけでなく、日本も世界全体の中での一国として捉えることができるグローバルな視野を持っている。

創意工夫・企画力

前例のないこと、これまでできなかったことを自ら企画し、状況に合わせて実践する能力を備えている。

粘り強さ・コミュニケーション力・交渉力

周囲の理解を勝ち取るために焦らず、慌てず、諦めない姿勢を持ち、取り組む。

語学力

英語、スペイン語、フランス語、ポルトガル語、中国語、アラビア語、ベンガル語、インドネシア語、タガログ語など、現地の言葉で日常的コミュニケーションができる能力がある。

トラブルに動じない 強さと柔軟性

想定していなかった事態に遭遇しても、冷静沈着に対応することができる。

JICA 海外協力隊と SDGs

SDGs の達成に挑み続ける JICA 海外協力隊

開発途上国で、現地の様々な課題解決に取り組む JICA 海外協力隊。活動分野は 9 分野、190 職種以上と多岐にわたり、どの業種も持続可能な開発目標 (SDGs) の達成に欠かせないものです。そして協力隊での経験は、帰国後も様々な形で社会に還元されています。

6 マーケティングや観光に関わるシゴト
観光
経営管理 など

5 福祉に関わるシゴト
ソーシャルワーカー
障害児・者支援
高齢者介護 など

4 生活サービスに関わるシゴト
土木
廃棄物処理
建築 など

3 エネルギーに関わるシゴト
電力
再生可能・省エネルギー など

8 食べ物や自然に関わるシゴト
野菜栽培
家畜飼育
土壌肥料 など

7 ものづくりに関わるシゴト
自動車整備
建設機械
食品加工 など

9 国・地域づくりに関わるシゴト
コミュニティ開発
コンピュータ技術
防災・災害対策 など

1 教育やスポーツなど人を育てるシゴト
小学校教育
各スポーツ など

2 いのちに寄り添うシゴト
看護師
感染症・エイズ対策
理学療法士 など

JICA 埼玉デスクから一言

¡Hola!(オラ)
JICA 埼玉デスクの矢田部です。
埼玉で生まれ育ち、JICA 海外協力隊として、中米・ニカラグアの小学校で活動した後、今は埼玉での国際協力をひろげるお手伝いをしています。

このパンフレットでは埼玉県から協力隊に参加し、途上国の現場で様々な体験をしてきた 10 名の方々を紹介しています。手に取ってくださった方々にとって、途上国や世界を知るヒント、そして国際協力を考えるきっかけ、持続可能な世界を想うツールになったら幸いです。



2030年までに世界を変革していくための 17の目標

What 's SDGs?

SDGs とは、“ Sustainable Development Goals ” (持続可能な開発目標) の略です。2015 年 9 月 国連本部で、日本を含む 193 の加盟国が、「みんながずっと地球に住み続けられるようにするためには」「みんなにとって幸せな未来をつくるためには」 どうしたらいいかを話し合い、採択された世界共通の目標です。SDGs は開発途上国のみならず、先進国が抱える課題も網羅し、国や NGO などだけでなく、民間企業や市民ひとりひとりの取り組みが求められています。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



私たちの行動は SDGs と繋がっている

私たちの身近な行動は、世界の課題と様々な形で繋がっています。例えば、フェアトレードの商品を選んで買い物することは、開発途上国の人々の働き方を変えるだけでなく、貧困をなくすことや、児童労働を防ぎ、子どもたちに教育を受けさせることにも繋がります。



2030年への願いと 派遣国での活動

楊 樹奈 (旧姓：日高)
YANAGI Juna

楊 殿閣
YANAGI Denka

派遣国 ニカラグア

派遣国 ニカラグア

職種 青少年活動

職種 青少年活動

隊次 2011年度2次隊

隊次 2012年度1次隊

*帰国後に結婚



私達二人はニカラグア国内で、社会的リスクに晒されている青少年の保護と育成に関わる活動として、樹奈*は2011年度2次隊として農村部のマタガルバで活動を開始し、殿閣*は2012年度1次隊として首都のマナグアにて活動を開始しました。

現地の異国情緒を肌で感じながら、目の前の青少年たちが抱えている問題に対して、日本人である自分には何が出来るかを試行錯誤し、充実した時間を過ごすことができました。



人権に関する講座の後に子どもたちと

“隣の人に関心を持ち、 目の前の人を大切にする”

現地の同僚と一軒ずつ家を巡回している時、ある母親が10代の娘のことを心配そうに語りました。「私の娘は色々な男性と関係を持ってしまうの。」

ニカラグアの農村部に派遣された私(樹奈)は、活動当初は地域の子どもたちを集め、避妊方法や感染症等の講座を行いました。



▲職員研修にて活動資金調達のためのピアス作り講座

現地の人々と寄り添いながら生活・活動をしていくと、問題解決には子どもたちを対象に行う教育活動だけではなく、子どもと家族の情報共有を促す環境整備も大切な事であると気づきました。



▼男子野外合宿活動の風景

首都にある国際NGOに配属された私(殿閣)は、ドラッグ依存や貧困、家庭内暴力などの問題を抱える青少年の保護と社会教育といったサービスを提供するプログラムに参加しました。NGOは(ドナーとの関係も含めて)ビジョンを示す必要がありましたが、施設の活動に参加する子どもたちは将来への見通しにおいて、むしろニカラグアの社会文脈という現実から見出すことしかできませんでした。

「ここにいる一握りの人がやっていることだけでなく、オレはこの外にいる99%のニカラグア人がやっていることも考えなくちゃいけない。」という少年Mの言葉は今でも忘れられません。このギャップを埋めるために現地スタッフと一緒に精力を尽くしましたが、より大きな構造的変革が必要であることに気づき、今は先進国という現場から取り組んでいます。

また、子どもたちが周囲の大人達から見守られているという安心感を持つことも重要で、そのためにはどうしたら良いのか悩む日々を過ごしました。

二年の活動期間のうち後半は、子どもたちに関わる家族や地域の人々を巻き込み、よりよい地域環境をつくっていかう、と広い年齢層を対象にコミュニケーションや人権等に関するワークショップを実施しました。

昨今、日本では急速にSDGsが語られ、それに寄与する取り組みが各方面において求められるようになりました。しかし、その意義については、協力隊員からすれば、真新しいことではなく、むしろ途上国の現場で考えさせられてきた問題であり、日常的に向き合ってきた課題でもあるように思います。そういう意味では、日本は途上国から学ぶことは多いと思います。

ニカラグアから帰国後、私達二人は外務省や大学、NGO、ボランティア団体など様々な組織の活動に関わってきましたが、どんな仕事でも自分の隣で歩む人に心を寄せ、目の前の人を大切にするという点には変わりありません。SDGsは期限が設定されていますが、2030年以降も、人と人が支えあう社会であってほしいです。



ストリートチルドレンの施設にて空手講座



熊あゆみ
KUMA Ayumi

派遣国 ルワンダ

職種 野菜栽培

隊次 2018年度2次隊



「野菜栽培で収入を得て、姪を学校に行かせたい。」「お金がなく庭の野菜だけを1日1回食べる。」「子どもが病気がち。」など、野菜栽培を通して、そして人々との対話を通して生活の背景や、胸に抱く願いを知りました。

現地の行政を通じたダイナミックな農業技術支援を期待され、郡庁に配属されました。地域農家の現状調査や行政・地域農家間のサポート体制づくり、食育や雇用にも向けた聾学校生徒向けワークショップ

プなどを行いました。活動で心がけたのは、「？」を感じたら質問をすることです。異文化の中であっても対話を通して相手の考え方がわかり、人と人のつながりに変わっていくのが嬉しかったからです。



聾学校での肥料づくりワークショップ

“地域の人々とともに、より過ごしやすいまちを”



職員と作付面積・肥料調査



月曜は地域農家さんの作業日

現在の仕事では、地域団体の方と関わる機会がたくさんあります。何年も農業を続けるルワンダの方や、富士見市で地域に何年も携わっている方から今も学ばせていただいていた経験は

どこにいてもつながること、そして自分は一人ではなくいつも地域に支えられていることを実感します。皆さんとヒントを出し合い、2030年に向けてより過ごしやすいまちを作っていきます。

現地での活動経験が今の仕事でどういきているか

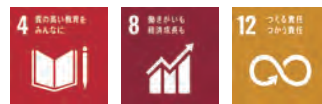
運動会でエアロピクスをやる様子



『色々な経験をしてから日本で先生になりたい』という強い思いから協力隊への参加を決めました。現地での体育の授業、エクササイズクラス、運動会の開催などを行いました。赴任当初、体育は授業ではなく休みの時間のように捉えられていましたが、結果的には体育という授業科目としての定着に成功しました。

“やってみなくちゃ始まらない”

いかに興味を持ってもらえるかを考え続け、自分のプライドを捨てて、周囲の人たちを頼るという方法で現地の先生を巻き込んで授業を進めました。そこで『人との関りの大切さ』と『可能性は無限大』ということ深く学びました。



佐伯 侑梨加
SAEKI Yurika

派遣国 モルディブ

職種 体育

隊次 2014年度2次隊



伝統的なダンスの発表の日の写真

帰国後は、舞台女優、ワーキングホリデー、仲居の仕事、オーストラリアでの日本の抹茶販売の起業、自著の出版……様々なチャレンジを繰り広げました。特に、本の執筆は若者の視野を広げ、挑戦することを応援したいという気持ちからです。

現在、講師としてJICAの国際協力出前講座や、母校である日本体育大学のスポーツ国際学科の学生に対して講義を行いつつ、アメリカ人の夫と二人三脚で日本の空き家問題を解決するような会社を起業しようとしています。愛と感謝の輪を広げることをモットーに活動をする日々を過ごしています。



イベントに会場された家族とモノトーンからカードゲーム

私がエクアドルで活動したリハビリセンターは、標高約2600mの山間部にある小さな町にあります。地域医療は都心部との格差が大きく、リハビリ室の設備や訓練道具は不足していました。

そこで私に求められた活動は、唯一の同僚である現地のセラピストに技術を伝えることでした。そのため、こまめに意見交換し治療の助言をしました。患者さんが問題を抱えて日常生活で困っていることはエクアドルも日本も同じです。しかし、生活環境・習慣や医療制度が異なります。



ワインのコルクとペットボトルで作ったリハビリ道具

私の常識を押し通して、日本の手技や知識をそのまま導入するのでは、現地での技術定着が見込めません。お互いの違いを踏まえた上で、相手の立場になって考えつつ、協力しながら治療に取り組みました。物不足には、訓練道具や自助具を廃材から作るアイデアを考案しました。

「日本で学びたい！」という人々を応援し、専門家としての技術提供を目指していきたい



ともに活動したセラピストと事務員

帰国後は、がん専門病院に再就職しがん患者さんに対するリハビリテーションに従事しています。

今後、自分の専門性や技術を磨きつつ、他のありかたに歩み寄る姿勢を大切に、日本での技術習得に意欲のある海外の人々を受け入れたり、専門家としての技術提供など何らかの形で還元していきたいです。



倉澤 友子
KURASAWA Tomoko

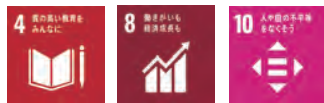
派遣国 エクアドル

職種 作業療法士

隊次 2016年度1次隊



同僚と一緒に脳性麻痺の女の子を治療中



富井 佳織
TOMII Kaori

派遣国 モザンビーク

職種 青少年活動

隊次 2019年度2次隊



はじめの頃、私に対し、物やお金をほしがってくるのが理解できなかつたのですが、彼らは決してやみくもに物を求めているのではなく、持っている人が、周りと共に共有することを良しとする価値観を持っていることが分かりました。

就職した会社の仕事はおもしろいながら、どうしても国際協力にかかわりたく、会社に籍を置いたまま、協力隊に参加しました。農村部のコミュニティースクールで小さな子どもたちに体育を教えることが私の活動です。



現地の先生方と協働して教材作り

「日本もモザンビークも大切なことは「人との繋がり」」

こうやって共に過ごす時間が増えるにつれ、だんだんと価値観が次第に受け入れられるようになり、相手を深く知ることによって問題の根本が見え、それを解決する方法もおのずと分かってきたのです。

現地語(ジャンガナ語)を交えて体育の授業を実施



友だちを応援する様子。チームワークの大切さを伝える



公用語はポルトガル語ですが、覚えた地域語(ジャンガナ語)を授業で使うと子どもたちとの距離を縮めることができるようになりました。子どもたちとの信頼関係ができると、彼らはパンを買ったら必ず私に半分わけてくれるようになりました。

現在は元いた会社に復職していますが、「相手を理解する」経験は大いに生きています。顧客や同僚を一面で判断するのではなく、時間をかけコミュニケーションを取ることで、相手の行動を理解し、本当の要望や問題の根本を見るように意識しています。

どこにいても大事なことは同じ。遠く離れた国での学びが、今の私をかたちづけている、全てつながっているんだ、と強く感じます。

現地での活動とSDGsへの貢献



土屋 雅人
TSUCHIYA Masato

派遣国 サモア

職種 サッカー

隊次 2015年度4次隊

“スポーツは国境を越える。”

世界各国で一番人気にあげられるのはサッカーですが、サモアで人気なのはラグビー。サッカーはなんとマイ

ナースポーツなんです。その強化・普及のためサッカー協会に配属され、U-17代表コーチや学校巡回サッカー教室などをメインに2年間活動しました。

サッカー教室前にチーム分けをする様子（サモア）



認定NPO法人テラ・ルネッサンス様との共催で、元子ども兵南スーダン難民対面のサッカー教室を開催（ウガンダ）

サッカー教室を拡大しよう、というとき、頼りになったのは同時期にサモアで活動していた小学校教育や作業療法士など隊員仲間です。様々な力を借りた結果、1,000人以上の子ども達とともに、性別や障害の有無に関係なく、スポーツを楽しむ時間をわかちあうことが出来ました。

現在はSOLTILO(株)の一員として、ウガンダ・ケニア・ルワンダ3ヶ国のHIVエイズ孤児・遺児や、国内の母子生活支援施設/児童養護施設の子ども達といった、主に経済的理由から機会の不平等に直面している子供たちを対象に、サッカーを通じて彼・彼女らの世界を広げるお手伝いをしています。

誰もが楽しめる安心安全な場を作るとともに

SDGsでも重視される「平等」「格差解消」に対し、スポーツという切り口で、自分たちだけではできないことで、誰もが楽しめる“安心安全な場づくり”を行うと同時に、パートナー企業や他業種の方々と協力して、自分たちだけではできないサッカー以外の才能育成活動にもチャレンジしています。

子ども達と自分自身の世界を広げていきたい”



サッカー普及プロジェクトの一環で、国内全学校を巡回し、サッカーボールをプレゼント



カカオの新芽は直射日光に弱い為、ココナッツの葉で作った日陰で育てているのがポイント

カカオの香り高いほろ苦ホットチョコレート、甘さ控えめのがトーショウラやカレーの隠し味、そしてチョコレートのおかゆ……フィリピン・レイテ州産のカカオを今も日本で美味しくいただいています。



協力隊としての私の任務は、所得につながる作物を取り入れることでした。収入源が一つの作物のみというのはリスクがありますが、育てたこと

がなく見込みの分からない作物を複数つくるといふ冒険もまた犠牲があり、多忙な日々のなかでは骨が折れる部分もあります。

“タブレア”と呼ばれるカカオマスのタブレットを作る男性

“カカオを植えて美味しく豊かに”



何が正しい答えなのか模索する中で、小さな負担で、興味のある人なら誰でも挑戦できるよう、病気に強いカカオの苗を導入し、現地の農業大学の協力も得て栽培のコツを広く案内しました。

カカオは、歴史的な背景から食文化との馴染みが深く、また、ココナッツやバナナといった作物と一緒に栽培できるのです。さらに地元にはすでにカカオマスの販路があり、収穫後の販売収入が見通せることが、安心感につながりました。手探りで始めたカカオづくりは、村の人々の新たな収入に結び付き、少しでも何かの楽しみが増えたら……と、私含めて3代にわたって協力隊員が取組んでいます。

言葉が通じず何かと手のかかる外国人の私でしたが、「自分とは異なるユニークな経験を持った人」として受け入れて、存在を楽しんでくれました。この経験は、日本に暮らす外国にルーツを持つ人びとも暮らしやすい地域づくりに取組む現在の仕事にもつながっています。自分自身や身近なひとの生きづらさや困りごとに関心を寄せるなかで、SDGsが誓う「誰一人取り残さない社会」に近づくことができたらと思っています。



坂本実玲
SAKAMOTO Mirei

派遣国 フィリピン

職種 村落開発普及員

隊次 2010年度2次隊
(それぞれの写真は2011年当時)



自治体の植林活動で小学校にカカオ苗を植える女性



“算数科指導力 向上プロジェクト が生んだ輪

皆川 順子
MINAGAWA Junko

派遣国 ホンジュラス/エクアドル

職種 小学校教育

隊次 2000年度1次隊 /
2015年度1次隊

現在、戸田市の中学校で教師をしていますが、これまでの協力隊活動の経験を生かして、総合の学習の時間で、Zoom を利用し国際交流をしています。



エルサルバドルのカウンターパートとJICA ボリビアの教育フェスティバルに参加

～エルサルバドルと エクアドル、



テーマはSDGsの「質の高い教育をみんなに」。始めに私自身も関わった JICA 算数指導力向上プロジェクトの活動を紹介しました。

このプロジェクトでは、算数教材の作成やその活用のための講習会実施、授業モニタリングなど、現地教員に対する指導支援がなされました。このプロジェクトで作られたスペイン語の算数教材は現在日本で暮らす、スペイン語を母語とする子どもたちにも贈呈され彼らの学びに役立っています。



そして 日本をつないだ 交流学習～”

私は、自分の活動が、今もこうして日本国内でも息づいていることに驚くとともに嬉しく思いました。言葉の壁が、学習の妨げとなり、困っている人はどこにでも存在します。教育を受けるのが当たり前に見える日本でも、「質の高い教育をみんなに」は、あらゆる人へ手を差し伸べなければならない課題であることに気がつきました。

交流学習は、エルサルバドルでの算数指導力向上プロジェクトの元カウンターパート、ダリラ教育技官とその家族や親戚の子供達を相手に始まりましたが、後に交流の輪は、エクアドルでの配属先の教育事務所の同僚マルサ職員の家族へと広がっていきました。

▲現在動めている中学校で半年間行われたオンライン交流会の様子①
▼現在動めている中学校で半年間行われたオンライン交流会の様子②



生徒達は自分のプロフィールや家族を紹介したり、自国の文化、産業について質疑応答を行ったりして、相互理解に取り組みました。



▲算数指導力向上プロジェクトの広域研修会で教育省ダリラ技官が基調講座を行う

「重さ kg」の学習で実際に計りを使って重さ比べしている様子

英語を介しての対話で、生徒たちはギクシャクしていましたが、なによりも気持ち伝わるように話すことを心がけ、コミュニケーションの大切さを学んでいるところです。

交流学習は、JICA の算数プロジェクトの縁で繋がる新しい体験。ダリラ技官やマルサ職員の厚意がなければ

成り立ちませんでした。また、埼玉デスクの矢田部さんがフォローをしてくださいました。2030年にはこうした交流学習が日常的に行われ、世界がもっと身近になることを楽しみにしています。



小児病棟に入院している患者さんの保護者の方々を対象とした栄養の勉強会

“スキルを磨き 国境のない看護師として 貢献したい”

次に描く夢



新井 淳子
ARAI Junko

派遣国 ウガンダ

職種 看護師

隊次 2019年度1次隊

現在では日本の病院で働いていますが、いつかまた途上国で看護師として活動したいと考えています。

所属先のマサフ病院は日本の援助で建てられた平屋の病院で老朽化が激しい状態でしたが働く職員の方々はエネルギーにみなぎり、日本人の私を温かく迎えてくれました。

短期間ながら、言葉や容姿、文化が違って、目の前の患者さんのために気持ちを一つにすること、うれしいこと楽しいことをわかちあえることには喜びを感じました。国際協力活動ができた、とは言い難く、状況把握だけで終わってしまいました。

活動内容は5S活動（整理・整頓・清掃・清潔・躰）と栄養失調児に対する支援でした。また、小児病棟の一員として、時には遠い村から時間をかけてやってくる小さな患者たちや、その家族にむきあってきました。5S委員会を新たに立ち上げることや、病院や地域での栄養指導を計画していましたが、2020年3月、新型コロナウイルス感染拡大のため緊急帰国となりました。



栄養失調を調べるための腕の太さを計測中



同僚と回診中

それでもウガンダの医療現場で活動したことは私にとってとても貴重な経験です。

▼プログラミング授業風景



多岐にわたる活動をてがけたことは、自身にとって、それまで考えもしていなかった新たなスキルを身に着ける経験になりました。

◀イベントでの講義指導の様子



▼国際交流アクティビティ



伊井 誠
II Makoto

派遣国 タイ

職種 コンピュータ技術

隊次 2018年度2次隊

タイ王国では、近年の急速な技術革新に伴い理系人材の育成が進められています。私の配属先は“プリンセスチュラポーンサイエンスハイスクール”。ここで私はプログラミング

の授業、学生プロジェクトへの協力、イベント企画運営、Webアプリ制作など、現地の教師や生徒のICTスキル向上を目的に多様な活動を行ってきました。



“タイと日本を繋げる 文化理解の促進に関わる そんなお仕事がしたい”

しかし一年半のタイでの学びを還元したく、また状況が落ち着けば再びタイで活動できるようにスキルを向上させたく、現在は一般の方向けにタイ語の学習動画 YouTube 投稿に挑戦しています。

経済的事情で日本に行けないタイ人の同僚や言語への理解が深まるにつれ、国の見え方が変化した経験をきっかけに、ゆくゆくは日本-タイでお互いの文化理解の促進を目的とした事業を立ち上げるつもりです。

コロナウイルスの影響で、協力隊二年の任期を半年残しての帰国となってしまいました。



国際協力 出前講座

International
Cooperation
for Your School!

海外のお話が
聞ける!



Q. 出前講座とは？

A. 開発途上国の実情や日本との関係、国際協力の必要性について考える機会に、JICA 海外協力隊経験者や開発途上国からの研修員を講師として紹介するプログラムです。

Q. どうやって活用できるの？

A. 総合的な学習の時間・各教科やPTA、自治体などの研修でご活用いただけます。

Q. どんな話が聞けるの？

A. 開発途上国の現場での実体験に基づいた話を聞くことができます。国際協力や途上国の文化や暮らしはもちろんのこと、環境、道徳、スポーツ、キャリア・進路など、ご希望のテーマや内容、時間に応じて講座を組み立てることができます。その他、持続可能な開発目標 (SDGs) や SDGs に関する日本・海外・JICA の取り組み事例等も講座に取り入れています。



途上国の
ワンシーンについて
何の写真かグループ
ディスカッション!



「実際に協力隊として派遣されたら？」ワークショップ
丸岡咲耶花 / ウガンダ

テーマ

ねらい・目的

国際協力
海外協力隊
体験談

世界の課題や日本とのつながり、海外協力隊の活動を知り、自分たちにできることを考える

異文化理解

開発途上国の文化や生活を知り、異文化に対する理解を深める

キャリア教育

国際協力の仕事や講師自身の生き方を知り、自分の将来やキャリアを考える

人権教育

開発途上国が抱えている問題・課題を知り、人権について考える



「途上国では15Lの水が入ったバケツを運ぶ人たちがいる」実体験

世界が
より身近に！



母校の大学で先輩に助産師としての国際協力活動について話す様子（オンライン）
比嘉 可苗 ニカラグア / グアテマラ

JICA 東京の学校教育アドバイザー前橋です。埼玉県で高等学校の教員をしています。現在、長期研修員として JICA 東京に在籍しています。

現在、さまざまな学校において、海外協力隊経験者による出前講座が広く行われています。

「持続可能な社会の担い手の育成」が学習指導要領で掲げられ、国際理解教育 / 開発教育 / SDGs の必要性が高まっている中で、地球規模の課題と地域の課題に取り組める * グローカルな視点が求められています。

また、日本への移民の方が増えている中で多文化共生 / 異文化理解という点も大きなテーマとなっています。

※ グローカル (Glocal) とは「地球規模・世界規模」を意味するグローバル (Global) と、「地元・地域」を意味するローカル (Local) という2つの意味を組み合わせた造語のこと。

『今、JICA 出前講座が求められる理由』



独立行政法人国際協力機構東京センター
学校教育アドバイザー
前橋 俊輔

今回のパンフレットの中で、「はじめの頃、私に対し、パンを求めてくれることが理解できなかったのですが、彼らは決してやみくもに物を求めているのではなく、持っている人が、周りと共に共有することを良しとする価値観を持っていることが分かりました。」というエピソードが紹介されています。出前講座は、世界に目を向け、価値観の多様性を育む貴重な機会になると思います。

埼玉デスクの矢田部さんと出前講座に学校を訪問した際に、ニカラグアの話や聞いたことが印象に残っています。話を聞いた児童・生徒から「開発途上国に対する見方が変わった。ただ可哀想ではなく、支援の在り方について考えるようになった」や「実際にニカラグアへ行ってみたい」などの感想がありました。海外協力隊経験者の皆様の体験をおして世界と日本を知る学びを、皆様も、是非。

協力隊に興味がある！
出前講座をやってほしい！
国際協力にかかわりたい！
等のご要望やご質問があったら
お気軽に連絡ください！！



埼玉で、埼玉から、皆さまと
「持続可能な社会」に向けて
あゆんでいきたいです！

JICA 埼玉デスク
矢田部 健佑

もっと知りたい、申し込みたいという方は

JICA 東京 出前講座 Search

もしくは、
JICA 東京国際協力
出前講座ページ QR コードを
お読み取りください。



* ご相談等ございましたら
お気軽に裏表紙の埼玉デスク連絡先にお問い合わせください。

JICA 海外協力隊について 知りたい方は

JICA 協力隊

<https://www.jica.jp/volunteer>

JICA の SDGs について 知りたい方は

JICA SDGs

<https://www.jica.jp/aboutoda/sdgs>



JICA 埼玉デスク

〒330-0074

埼玉県さいたま市浦和区北浦和 5-6-5

浦和地方庁舎 3F (公財) 埼玉県国際交流協会内

☎ 048-833-2992 ☎ 048-833-3291

✉ jicadpd-desk-saitamaken@jica.go.jp